博 士 論 文 要 旨

論 文 題 名 ： 十 七 世 紀 渡 日 明 知 識 人 研 究
― 中 日 思 想 交 流 を 中 心 に ―

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
コウ　ビサン
HUANG Weishan

本論文では、明清王朝交替とかかわる渡日明知識人をめぐる、十七世紀中葉における中日知識人間の思想交流に注目する。「朱舜水と近世前期日本の儒学」と「渡日唐僧と近世黄檗宗の成立・展開」の二部に分かれており、前者では明儒の朱舜水を中心に、後者では明僧の隠元を中心として十七世紀中日の儒仏思想における交流に関して考察が行われた。以下に、各章の概要を示す。

第一部では、明儒の代表として朱舜水を取り上げた。彼の渡日・帰化経歴を当該期東アジア情勢と関連して「海上経営」時代、長崎流寓時代、水戸藩奉仕時代の三期に分けて考察を加えた。彼の思想が明末思想の特質を帯びたものという前提のもと、近世日本知識人との交流を主軸に学問・自他認識・儒礼実践の側面から朱舜水と近世前期日本の儒学との関係性を検討した。

第一章「朱舜水の「海上経営」と明清交替期の東アジア秩序」では、明清交替を発端とした朱舜水の亡命活動と彼の来日・帰化経歴を考察した。〈舟山―厦門―長崎―会安〉を拠点として行われた舜水の「海上経営」経歴をたどることで、まず彼自身の明遺民としての価値観や華夷観念、さらには海上活動を通じた彼の思想的変化を描き出した。

第二章「朱舜水の思想的特質――明末清初期の思想と関連して」では、朱舜水の思想について明末清初期大陸側の「実学」思潮を踏まえて検討した。「経世致用」を提唱する「実学」思潮に身を置いていた朱舜水の思想における経世的・実践的儒学傾向の内実を呈示しようとした。

第三章「朱舜水と日本知識人の交流――安東省菴・小宅処斎を中心に」では、朱舜水の長崎滞在期における日本知識人との交流について、安東省菴と小宅処斎の二人を取り上げて検討した。「朱子学・陽明学の異同問題」と華夷観の検討を通じて三人の学問観および自他認識の立場を確認し、そのうえで明末思想および大陸側の新情報を携帯する舜水と近世前期日本儒者との実際の対面を通じて、当該期中日思想交流の実態と歴史的意義を呈示することを試みた。

第四章「水戸藩の儒学実践と朱舜水に関する一考察」では、朱舜水が水戸藩招聘・奉仕期を対象として、藩内の儒礼実践における朱舜水の役割について水戸藩の儒礼実践という側面から考えた。舜水は明儒という身分を自覚しつつ明代儒学の知識を生かして水戸藩の顧問の役目を果たし、特に藩内の文教事業と儒礼実践に力を注いでいたことを明らかにした。

第二部では、十七世紀渡日唐僧の代表として黄檗僧を取り上げ、彼らの渡日経過、および近世黄檗宗の成立・展開について、当該期の情勢も踏まえたうえで考察した。ここでは隠元隆琦の思想を近世黄檗宗の思想的底流として取り上げ、近世黄檗宗の明風禅・明風文化の内実について、明末清初期の仏教思想における新展開を視野に入れて検討した。隠元・独立をはじめとした渡日唐僧における仏学思想はもちろんのこと、彼らの経歴ともかかわる自他認識なども考察の対象とした。さらに隠元・近世黄檗宗によって触発された近世日本の内外意識に関して、隠元・黄檗批判をした反発者の議論を取り上げて検討した。

第五章「隠元渡日と近世黄檗宗の展開」では、まず隠元の渡日および近世日本における黄檗宗の開立・展開をめぐる史実を確認した。そのうえで、隠元の立場および留日弘法の要因について、彼の日本禅林にたいする認識、明末清初期の政治・社会情勢や禅林状況などとの関係性から検討した。

第六章「明末清初期の仏教における儒仏一致・禅浄双修――近世黄檗宗の思想土台との関係より」では、近世黄檗宗に代表される明風禅の思想的土台を検討した。明末清初期の仏教思想の新展開である「儒仏一致」と「禅浄双修」に着目することによって、この両思想が近世黄檗宗の特徴であるのみならず、近世日本における仏教にたいして新たなものとしても受容されてきたことを明らかにした。

第七章「独立性易における「華夷の弁別」」では、明清交替に伴う政治的混乱を契機に渡日した独立性易を中心に扱った。独立はもと儒医・薬商身分であったが、隠元に帰依して黄檗僧へと転換するようになった。彼の自伝・詩文・書簡などの史料にみられる明清交替に関する言及を分析し、「華夷の弁別」に関連する議論を中心に考察を行った。

第八章「隠元・近世黄檗宗に対する日本側の反響――批判者としての向井元升と無著道忠」では、隠元渡日および近世黄檗宗の展開による近世日本への影響を立体的に論じるため、批判的議論を取り上げて捉え直した。長崎住民の元升と、臨済宗妙心寺禅僧の道忠の二人を取り上げ、それぞれの立場からの隠元批判を考察し、さらに自他認識という視点で『知恥篇』と『黄檗外記』にみられる隠元・黄檗批判の思想史的意味を検討した。

以上の検討を通して、明儒の朱舜水と明僧の隠元・独立をめぐった近世日本での思想交流・活動の歴史的実態を明らかにし、さらに十七世紀中日思想交流における渡日明知識人の新たな位置づけを試みた。渡日明知識人をめぐる思想交流が、単に個々の人物研究における思想内部の問題にとどまらず、明・清王朝交替といった具体的歴史事件によって影響された結果であることが確認できた。また、渡日明知識人という集団において、彼らにとって直面せざるを得ない共通の問題が存在していた点、すなわち華夷観に立脚した自他認識についてである。明末清初期の思想背景を踏まえて朱舜水、隠元隆琦、独立性易など渡日明知識人の思想を検討することを通じて、彼らの思想には個人の見解という枠組みを超えて明末清初期の思想の一般的特質が顕在することが明らかにされた。ようするに、渡日明知識人を介した儒・仏思想交流と活動は、明末清初期の思想と近世日本の思想との歴史的遭遇を示すものとして位置付けられる。